

# 人間失格

烈火の如く怒られそうな気がしてたまらず、逢うのに 頗るおっくうがる性質でしたので、いよいよ、銀座は敬遠の形でしたが、しかし、そのおっくうがるという性質は、決して自分の狡猾さこうかつではなく、女性というものは、休んでからの事と、朝、起きてちりからの事との間に、一つの、塵ほどの、つながりをも持たせず、完全の忘却の如く、見事に二つの世界を切断させて生きているという不思議な現象を、まだよく呑みこんでいなかったからなのでした。十一月の末、自分は、堀木と神田の屋台で安酒を飲み、この悪友は、その屋台を出てからも、さらにどこかで飲もうと主張し、もう自分たちにはお金が無いのに、それでも、飲もう、飲もうよ、とねばるのです。その時、自分は、酔って大胆になっているからでもありませんが、

「よし、そんなら、夢の国に連れて行く。おどろくな、酒池肉林という、……」

「カフェか?」

「そう」

「行こう!」

というような事になって二人、市電に乗り、堀木は、はしゃいで、

「おれは、今夜は、女に飢え渴いているんだ。女給にキスしてもいいか」

自分は、堀木がそんな酔態を演じる事を、あまり好んでいないのでした。堀木も、それを知っているので、自分にそんな念を押すのでした。

「いいか。キスするぜ。おれの傍に坐った女給に、きっとキス

して見せる。いいか」

「かまわんだろう」

「ありがたい！おれは女に飢え渴いているんだ」

銀座四丁目で降りて、その所謂酒池肉林の大カフェに、ツネ子をたのみの綱として  
ほとんど無一文ではいり、あいているボックスに堀木と向い合って腰をおろした  
とたんに、ツネ子ともう一人の女給が走り寄って来て、そのもう一人の女給が  
自分の傍に、そうしてツネ子は、堀木の傍に、ドサンと腰かけたので、自分は、ハッ  
としました。ツネ子は、いまにキスされる。

惜しいという気持ではありませんでした。自分には、もともと所有慾というものは薄  
く、また、たまに幽かに惜しむ気持はあっても、その所有権を敢然と主張し、人と  
争うほどの氣力が無いのでした。のちに、自分は、自分の内縁の妻が犯されるの  
を、黙って見ていた事さえあったほどなのです。自分は、人間のいざこざに出来るだ  
け触りたくないのです。その渦に巻き込まれるのが、おそろしいのです。ツネ子  
と自分とは、一夜だけの間柄です。ツネ子は、自分のものではありません。惜しい  
、など思い上った慾は、自分に持てる筈はありません。けれども、自分は、ハッとし  
ました。自分の眼の前で、堀木の猛烈なキスを受ける、そのツネ子の身の上を、  
ふびんに思ったからでした。堀木によごされたツネ子は、自分とわかれなければなら  
なくなるだろう、しかも自分にも、ツネ子を引き留める程のポジティブな熱は無い、  
ああ、もう、これでおしまいなのだ、とツネ子の不幸に一瞬ハッとしたものの、すぐ  
に自分は水のように素直にあきらめ、堀木とツネ子の顔を見比べ、にやにやと笑い  
ました。

人間失格女だったのです。案外とも、意外とも、自分には霹靂に撃ち酔漢の  
キスにも 価 いしない、ただ、みすばらしい、貧乏くさい飲んでみたい気持でした。  
所謂俗物の眼から見ると、ツネ子は笑うのです。ました。「お酒を。「やめた  
!」「さすがのおれも、こんな貧乏くさい女には、……」自分は、小声でツネ子に言い  
ました。それこそ、浴びるほど閉口し切ったように、腕組みしてツネ子をじろじろ眺  
め、と堀木は、お金は無い」口をゆがめて言い、

しかし、

じたい じつ おも わる てんかい  
事態は、実に思いがけなく、もっと悪く展開せられ

く<sup>おも</sup>だ<sup>じぶん</sup>か<sup>れい</sup>れた<sup>な</sup>思<sup>い</sup>い<sup>で</sup>し<sup>た</sup>。自<sup>分</sup>は、こ<sup>れ</sup>ま<sup>で</sup>例<sup>の</sup>無<sup>か</sup>っ<sup>た</sup>ほ<sup>ど</sup>、

いくらでも、いくらでも、お酒を飲み、ぐらぐら酔って、ツネかな子と顔を見合せ、哀  
しく微笑み合い、いかにもそう言われてみると、こいつはへんに疲れて貧乏くさい

おんな おも どうじ かね な もの しんわ ひんぷ ふ わ ちんぷ  
だけの 女 だな、と思うと同時に、金の無い者どうしの親和(貧富の不和は、陳腐の

ようでも、やはりドラマの永遠えいえんのテーマの一つだと自分ひとは今では思っていますじぶん いま おもが)

そいつが、その親和感<sup>しんわかん</sup>が、胸<sup>むね</sup>に込み上げて来<sup>こ</sup>ほほえて、ツネ子<sup>らいこ</sup>がいとしく、生<sup>こ</sup>れてこの  
とき  
時はじめて、われから積<sup>せつき</sup>極<sup>よく</sup>的に、微<sup>び</sup>弱<sup>じやく</sup>ながら恋<sup>こい</sup>の心<sup>こころ</sup>の動<sup>うご</sup>くのを自<sup>じ</sup>覚<sup>かく</sup>しました。吐<sup>は</sup>

きました。ぜんごふかく 前後不覚になりました。お酒を飲んで、こんなに我を 失うほど酔ったのも

、その時<sup>とき</sup>がはじめてでした。眼<sup>め</sup>が覚<sup>さ</sup>めたら、枕<sup>まくら</sup>もとにツネ子<sup>こ</sup>が坐<sup>すわ</sup>っていました。

ほんしょ　だいく　にかい　へや　ね　かね　き　えん　き  
本所の大工さんの二階の部屋に寝ていたのでした。「金の切れめが縁の切れめ、

なんておっしゃって、冗談じょうだんかと思おもう

人間失格覚悟は、<sup>にげんしかくかくご</sup>出来ていなかったのです。どこかに「遊び」<sup>あそ</sup>がひそん生きて行け<sup>い い</sup>

そうもなく、そのひとの<sup>ていあん</sup>提<sup>き</sup>案<sup>あん</sup>に<sup>きがる</sup>気軽<sup>どうい</sup>に同意<sup>かね</sup>しました。金<sup>うんどう</sup>、れいの運<sup>おんな</sup>動<sup>がくぎょう</sup>、女<sup>がくぎょう</sup>、学<sup>がくぎょう</sup>業<sup>がくぎょう</sup>

、<sup>かんが</sup>考えると、とてもこの上<sup>うえ</sup>こらえてようでしたし、また、<sup>じぶん</sup>自分も、<sup>よ</sup>世の中への<sup>なか</sup>恐怖<sup>きょうふ</sup>、

わづらわしさ、言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切っていたでい

ました。めやな。うちが、かせいであげても、だめか」「だめ」その日の午前<sup>ひ</sup>、二人は<sup>ごぜん</sup> <sup>ふたり</sup>

あさくさ　ろっく　のむ　とき　じっかん  
浅草の六区をさまよっていました。喫けれども、その時にはまだ、実感としての「

死のう」というそれから、女おんなも休やすんで、夜明よるけがた、女おんなの口くちから「死し」という

うていたら、<sup>ほんき</sup>本気か。<sup>らい</sup>来てくれないの<sup>き</sup>だもの。ややこしい切れ

さてん  
茶店にはいり、<sup>ぎゅうにゅう</sup>牛乳<sup>の</sup>を飲みました。

しゅうち「あなた、<sup>はら</sup>払<sup>お</sup>うて置<sup>い</sup>いて」<sup>じぶん</sup>た<sup>た</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は立<sup>た</sup>っ<sup>て</sup>て、<sup>たもと</sup>袂<sup>たもと</sup>から<sup>ぐち</sup>が<sup>だ</sup>ま<sup>だ</sup>口<sup>ぐち</sup>を出<sup>だ</sup>し、

ひらくと、銅錢が三枚、せいさんのうり羞恥よりも凄惨の思いに襲われ、

のうり　うか　せんゆうやかた　じぶん　へ　や　せいふく　ふとん　のこ  
たちまち脳裡に浮ぶものは、仙遊館の自分の部屋、制服と蒲団だけが残されて

あるきりで、あとはもう、<sup>しちぐさ</sup>質草になりそうなものの一つも無い<sup>ひと</sup>荒<sup>な</sup>涼<sup>こうりょう</sup>たる<sup>へ</sup>部屋、<sup>ほか</sup>他に

じぶん ちゃく ある かすり きもの じぶん げんじつ い  
は自分のいま 着て歩いている 緋の着物と、マント、これが自分の現実なのだ、生  
きて行けない、とはっきり思い知りました。 自分がまごついているので、 女も立って  
、自分のがま口をのぞいて、「あら、たったそれだけ？」 無心の声でしたが、これが  
また、じんと骨身にこたえるほどに痛かったのです。はじめて自分が、恋したひとの  
声だけに、

いた どうせんさんまい かね  
痛かったのです。それだけでも、これだけもない、銅銭三枚は、どだにお金であり  
ません。それは、自分が未だかつて味わった事の無い奇妙な屈辱でした。とても生  
きておられない屈辱でした。所詮その頃の自分は、まだお金持ちの坊ちゃんという  
くさぞく だっ き とき じぶん し  
種属から脱し切っていなかったのでしょうか。その時、自分は、みずからすすんでも死  
のうと、実感として決意したのです。

よる じぶん かまくら うみ と こ おんな おび みせ ともだち  
その夜、自分たちは、鎌倉の海に飛び込みました。 女は、この帯はお店のお友達  
から借りている帯やから、と言って、帯をほどき、畳んで岩の上に置き、自分も  
マントを脱ぎ、同じ所に置いて、一緒に入水しました。

おんな し じぶん たす じぶん こうとうがっこう  
女のひとは、死にました。そうして、自分だけ助かりました。自分が高等学校の  
せいと ちち な いわゆる  
生徒ではあり、また父の名にもいくらか、所謂ニュース・ヴァリュがあったのか、  
しんぶん おお  
新聞にもかなり大きな

もんだい と あ  
問題として取り上げられたようでした。

じぶん うみべ びょういん しゅうよう こきょう しんせき もの か  
自分は海辺の病院に収容せられ、故郷から親戚の者がひとり駆けつけ、さまざま  
しまつ ちち いっかなか げきど  
の始末をしてくれて、そうして、くにの父をはじめ一家中が激怒しているから、これ  
っきり生家とは義絶になるかも知れぬ、と自分に申し渡して帰りました。けれども自分  
は、そんな事より、死んだツネ子が恋いしく、めそめそ泣いてばかりいました。本当  
に、いままでのひとの中で、あの貧乏くさいツネ子だけを、すきだったのですから。

げしゆく むすめ たんか ごじゅう か なが てがみ らい い  
下宿の娘から、短歌を五十も書きつらねた長い手紙が来ました。「生きくれよ」  
ことば たんか ごじゅう じぶん びょうしつ  
というへんな言葉ではじまる短歌ばかり、五十でした。また、自分の病室に、  
かんごふ ようき わら あそ らい じぶん て にぎ かえ かんごふ  
看護婦たちが陽気に笑いながら遊びに来て、自分の手をきゅっと握って帰る看護婦も  
いました。

自分の 左 肺に故障のあるのを、その 病 院 で発見せられ、これがたいへん自分に  
好都合な事になり、やがて自分が自殺幫助罪という罪名で 病 院 から警察に連れて  
行かれましたが、警察では、自分を 病 人 あつかいにしてくれて、特に保護室に  
収 容 しました。深夜、保護室の隣の 宿 直 室 で、寝ずの番をしていた年寄りの  
お巡りが、間 のドアをそっとあけ、「おい!」と自分に声をかけ、「寒いだろう。  
こっちへ来て、あたれ」と言いました。自分は、わざとしおしおと 宿 直 室 には  
いって行き、椅子に腰かけて火鉢にあたりました。「やはり、死んだ 女 が恋いしい  
だろう」

「はい」

ことさらに、消え入るような細い声で返事しました。

「そこが、やはり 人 情 というものだ」

彼は次第に、大きく構えて来ました。

「はじめ、 女 と関係を結んだのは、どこだ」

ほとんど裁判官の如く、もったいぶって尋ねるのです。彼は、自分を子供と  
あなどり、秋の夜のつれづれに、あたかも彼自身が取調べの主任でもあるかのよう  
に 装い、自分から猥談めいた 述 懐 を引き出そうという魂胆のようでした。自分は  
素早くそれを察し、噴き出したいのを忖えるのに骨を折りました。そんなお巡りの「  
非公式な 訊問」には、いっさい 答 を拒否してもかまわないのだという事は、自分も  
知っていましたが、しかし、秋の夜ながに 興 を添えるため、自分は、あくまでも  
神 妙 に、その

お巡りこそ取調べの主任であって、刑罰の 軽 重 の決定もそのお巡りの思召し一つ  
に在るのだ、という事を固く信じて 疑われないような所謂誠意をおもてにあらわし、  
彼の助平の好奇心を、やや満足させる程度のいい加減な「陳 述」をするのです。

「うん、それでだいたいわかった。何でも正 直 に答えると、わたしのほうでも、そこ  
は手心を加える」

「ありがとうございます。よろしくお願<sup>ねが</sup>いいたします」

ほとんど入<sup>にゅうしん</sup> 神<sup>えんぎ</sup>の演技でした。そうして、自分<sup>じぶん</sup>のためには、何<sup>なに</sup>も、一つ<sup>ひと</sup>も、とくになら  
ない力<sup>りきえん</sup>演<sup>えん</sup>なのです。

夜<sup>よる</sup>が明<sup>あ</sup>けて、自分<sup>じぶん</sup>は署<sup>しよちょう</sup> 長<sup>よ</sup>に呼<sup>だ</sup>び出<sup>だ</sup>されました。こんどは、本<sup>ほん</sup>式<sup>しき</sup>の取<sup>とり</sup>調<sup>しら</sup>べなのです。

ドアをあけて、署<sup>しよちょう</sup> 長<sup>しつ</sup> 室<sup>しつ</sup>にはいったとたんに、

「おう、いい男<sup>おとこ</sup> だ。これあ、お前<sup>まえ</sup>が悪<sup>わる</sup>いんじゃない。こんな、い  
い 男<sup>おとこ</sup> に産<sup>う</sup>んだお前<sup>まえ</sup>のおふくろが悪<sup>わる</sup>いんだ」

いろ あさぐろ だいがくで かん わか しよちょう い  
色<sup>いろ</sup>の浅<sup>あさ</sup>黒<sup>くろ</sup>い、大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>出<sup>で</sup>みたいな感<sup>かん</sup>じのま<sup>ま</sup>だ若<sup>わか</sup>い署<sup>しよちょう</sup> 長<sup>ちやう</sup> でした。いきなりそう言<sup>い</sup>われて  
じぶん じぶん かお はんめん あかあざ ふぐしゃ  
自分<sup>じぶん</sup>は、自分<sup>じぶん</sup>の顔<sup>かお</sup>の半<sup>はん</sup>面<sup>めん</sup>にべ<sup>べ</sup>ったり赤<sup>あか</sup> 痣<sup>あざ</sup>でもあ<sup>あ</sup>るよう<sup>よう</sup>な、み<sup>み</sup>にく<sup>く</sup>い不<sup>ふ</sup>具<sup>ぐ</sup>者<sup>しゃ</sup>のよう<sup>よう</sup>な、  
み<sup>き</sup>じめな氣<sup>き</sup>がしま<sup>し</sup>した。

じゅうどう けんどう せんしゅ しよちょう とりしら じつ  
この柔<sup>じゅう</sup> 道<sup>どう</sup>か剣<sup>けん</sup> 道<sup>どう</sup>の選<sup>せん</sup> 手<sup>しゅ</sup>のよう<sup>よう</sup>な署<sup>しよちょう</sup> 長<sup>ちやう</sup> の取<sup>とり</sup> 調<sup>しら</sup> べは、実<sup>じつ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>っさ<sup>さ</sup>りし<sup>し</sup>てい<sup>い</sup>て、あ<sup>あ</sup>の  
しんや ろうじゅんさ しつよう こうしよく とりしら うん<sup>うん</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup> さ  
深夜<sup>しんや</sup>の老<sup>ろう</sup> 巡<sup>じゅん</sup> 査<sup>さ</sup>のひそ<sup>ひ</sup>かな、執<sup>しつ</sup> 拗<sup>よう</sup>き<sup>き</sup>わ<sup>わ</sup>まる好<sup>こう</sup> 色<sup>しよく</sup>の「取<sup>とり</sup> 調<sup>しら</sup> べ」とは、雲<sup>うん</sup> 泥<sup>でい</sup>の差<sup>さ</sup>があ<sup>あ</sup>り  
じんもん しよちょう けんじきよく おく しよるい  
ま<sup>ま</sup>した。訊<sup>しん</sup> 問<sup>もん</sup>がす<sup>す</sup>んで、署<sup>しよちょう</sup> 長<sup>ちやう</sup> は、検<sup>けん</sup> 事<sup>じ</sup> 局<sup>きょく</sup>に送<sup>おく</sup>る書<sup>しよ</sup> 類<sup>るい</sup>をし<sup>し</sup>たた<sup>た</sup>め<sup>め</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>ら、

「からだを丈<sup>じやうぶ</sup> 夫<sup>ぶ</sup>にしな<sup>し</sup>な<sup>な</sup>けれ<sup>れ</sup>や、い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>ね。血<sup>け</sup> 痰<sup>たん</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>てい<sup>い</sup>る<sup>る</sup>よう<sup>よう</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か」

い  
と<sup>い</sup>言<sup>い</sup>いま<sup>ま</sup>した。

あさ せき で じぶん せき で  
そ<sup>そ</sup>の朝<sup>あさ</sup>、へ<sup>へ</sup>ん<sup>ん</sup>に咳<sup>せき</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>て、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は咳<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>に、ハ<sup>ハ</sup>ン<sup>ン</sup>ケ<sup>ケ</sup>チ<sup>チ</sup>で

い  
と<sup>い</sup>言<sup>い</sup>いま<sup>ま</sup>した。

それから

かくへいき  
核<sup>かく</sup>兵<sup>へい</sup>器<sup>き</sup>

で らい  
出<sup>で</sup>て来<sup>らい</sup>て、



しん  
真

そし

ちょう  
長 は、

けんじきよく おく しょるい  
検事局に送る書類をしたためながら、

じょうぶ  
「からだを丈夫にしなけれや、

いかんね。

りしていて、

じゅうどう けんどう せんしゅ しょちょう とりしら  
この柔道か剣道の選手のような署長の取調べは、

じつ  
実にあっさ

しんや ろうじゅんさ  
あの深夜の老巡査のひそかな、

うんでい さ  
雲泥の差がありました。

じんもん しょしつよう こうしょく  
訊問がすんで、署執拗きわまる好色

とりしら  
の「取調べ」とは、

た

い じぶん  
きなりそう言われて自分は、

いろ あさぐろ  
色の浅黒い、

だいがくで かん わか しょちょう  
大学出みたいな感じのまだ若い署長でした。

じぶん かお はんめん あかあざ  
、自分の顔の半面にべったり赤痣で

いとこ　う　まえ　わる  
い　男　に産んだお前のおふくろが悪いんだ」

もあるような、

みにくい不具者のような、

き  
みじめな気がしまし

くち　おお  
口を覆っていたのですが、そのハンケチに赤いあられが降ったみたいに血がついていた  
のです。けれども、それは、のどから出た血ではなく、昨夜、耳の下に出来た小さい  
おできをいじって、そのおできから出た血なのでした。しかし、自分は、それを言い明  
さないほうが、べんぎ　こと　き  
便宜な事もあるような気がふとしたものですから、ただ、

ふせめ　しゅしょう　こた　お  
と、伏眠になり、殊　勝　げに答えて置きました。

「はい」

しよちょう　しよるい　か　お  
署　長　は書　類　を書き終えて、

き　そ  
「起訴になるかどうか、それは検事殿がきめることだが、お前の身元引受人に、  
でんぼう　でんわ　よこはま　けんじきょく　らい  
電　報か電話で、きょう横　浜の検　事　局に來てもらうように、たのんだほうがいいな。  
だれ  
誰か、あるだろう、お前の保護者とか保証人とかいうものが」

## こっとう

ちち　とうきょう　べっそう　で　い　しやがこっとうしょう　しぶた　じぶん　どうきょうじん  
父の東　京の別　荘に出入りしていた書画骨董　商　の渋田という、自分たちと同　郷　人  
で、父のたいこ持ちみたいな役も勤めていたずんぐりした独身の四十男が、自分の  
がっこう　ほしょうにん　じぶん　おも　だ　おとこ　かお　こと　め  
学校の保証人になっているのを、自分は思い出しました。その　男　の顔が、殊に眼  
つきが、ヒラメに似ているというので、父はいつもその　男　をヒラメと呼び、自分も、  
よ  
そう呼びなれていました。

じぶん　けいさつ　でんわちょう　か　いえ　でんわばんごう　さが　み  
自分は警察の電話帳を借りて、ヒラメの家の電話番号を捜し、見つかったので、  
でんわ　よこはま　けんじきょく　らい　たの　ひと  
ヒラメに電話して、横　浜の検　事　局に來てくれるように頼みましたら、ヒラメは人が



かわ い ば くちょう ひきう  
変ったみたいな威張った口調で、それでも、とにかく引受けてくれました。

でんわき しょうどく なに けったん で  
「おい、その電話機、すぐ消毒したほうがいいぜ。何せ、血痰が出ているんだから」

じぶん ほごしつ ひ あ まわ げん  
自分が、また保護室に引き上げてから、お巡りたちにそう言  
いつけている署長の大きな声が、保護室に坐っている自分の耳にまで、とどきまし  
た。お昼すぎ、自分は、細い麻縄で胴を縛られ、それはマントで隠すことを許され  
ましたが、その麻縄の端を若いお巡りが、しっかり握っていて、二人一緒に電車で  
よこはま むか じぶん すこ ふあん な けいさつ ほごしつ  
横浜に向いました。けれども、自分には少しの不安も無く、あの警察の保護室も、  
ろうじゅんさ あ あ じぶん ざいにん しば  
老巡査もなつかしく、嗚呼、自分は どうしてこうなのでしょう、罪人として縛られ  
ると、かえってほっとして、そうしてゆったり落ちついて、その時の追憶を、いま書  
くに当たっても、本当にのびのびした楽しい気持になるのです。しかし、その時期の  
おも で なか ひと れいかんさんと しょうがい ひさん  
なつかしい思い出の中にも、たった一つ、冷汗三斗の、生涯わすれられぬ悲惨な  
じぶん けんじきよく うすぐら いっしつ けんじ かんたん とりしら  
しくじりがあったのです。自分は、検事局の薄暗い一室で、検事の簡単な取調べ  
う  
を受けま

けんじ よんじゅっさいぜんご ものしず じぶん びぼう い  
した。検事は四十歳前後の物静かな、(もし自分が美貌だったとしても、それは謂わ  
じゃいん びぼう ちが けんじ かお ただ びぼう い  
ば邪淫の美貌だったに違いありませんが、その検事の顔は、正しい美貌、とでも言  
たいような、聡明な静謐の気配を持っていました)コセコセしない人柄のようでした  
じぶん まった けいかい ちんじゅつ  
ので、自分も全く警戒せず、ぼんやり陳述していたのですが、

とつぜん せき で らい じぶん たもと だ ち み  
突然、れいの咳が出て来て、自分は袂からハンケチを出し、ふとその血を見て、  
せき なに やく た し かけひ ところ おこ  
この咳もまた何かの役に立つかも知れぬとあさましい駆引きの心を起し、ゴホン、  
ふた にせ せき おおげさ つ くわ うち  
ゴホンと二つばかり、おおげさまけの膺の咳を大袈裟に付け加えて、ハンケチで口  
おお けんじ かお み かんいっぱつ  
を覆ったまま検事の顔をちらと見た、間一髪、

「ほんとうかい？」

びしょう れいかんさんと おも だ ま  
ものしずかな微笑でした。冷汗三斗、いいえ、いま思い出しても、きりきり舞いをし  
ちゅうがくじだい ば か  
たくなります。中学時代に、あの馬鹿

の竹一から、ワザ、ワザ、と言われて脊中<sup>せなか</sup>を突かれ、地獄<sup>じごく</sup>に蹴落<sup>けるおち</sup>けおとされた、  
その時の思い以上<sup>いじょう</sup>と言っても、決して過言<sup>けつ かごん</sup>では無い気持ちです。あれと、これと、二  
つ、自分の生<sup>しょうがい</sup>涯<sup>お</sup>に於ける演技<sup>えんぎ</sup>の大失敗<sup>だいしっぱい</sup>の記録<sup>きろく</sup>です。検事<sup>けんじ</sup>のあんな物静<sup>ものしず</sup>かな侮蔑<sup>ぶべつ</sup>  
ぶべつに遭<sup>あ</sup>うよりは、いっそ自分<sup>じぶん</sup>は十年<sup>じゅうねん</sup>の刑<sup>けい</sup>を言<sup>いい</sup>渡<sup>わた</sup>されたほうが、ましだったと  
おも こと とき ほど  
思う事さえ、時たまある程なのです。

自分<sup>じぶん</sup>は起訴<sup>きそ</sup>猶予<sup>ゆうよ</sup>になりました。けれども一向<sup>いっこう</sup>にうれしくなく、世<sup>よ</sup>にもみじめな気持<sup>きもち</sup>で  
、検事局<sup>けんじきょく</sup>の控室<sup>ひかえしつ</sup>のベンチに腰かけ、引取り人<sup>こし ひきと にん</sup>のヒラメが来るのを待<sup>く ま</sup>っていました。

背後<sup>はいご</sup>の高い窓<sup>たか まど</sup>から夕焼け<sup>ゆうや</sup>の空<sup>そら</sup>が見え、鷗<sup>み</sup>かもめが、「女<sup>おんな</sup>」という字<sup>じ</sup>みみたいな形<sup>かたち</sup>で  
と  
飛<sup>と</sup>んでいました。

## だいさん しゅ き 第三の手記

### 1

竹一<sup>たけいち</sup>の予言<sup>よげん</sup>の、一つは当<sup>ひと</sup>り、一つは、はずれました。ほ<sup>ほ</sup>惚<sup>ほ</sup>れられるという、名譽<sup>めいよ</sup>で無<sup>な</sup>  
い予言<sup>よげん</sup>のほうは、あたりましたが、きつと偉<sup>えら</sup>い絵画<sup>え えが</sup>きになるという、祝<sup>しゅく</sup>福<sup>ふく</sup>の予言<sup>よげん</sup>は  
、はずれました。自分<sup>じぶん</sup>は、わずかに、粗悪<sup>そあく</sup>な雑誌<sup>ざっし</sup>の、無名<sup>むめい</sup>の下手<sup>へ た</sup>な漫画家<sup>まんがか</sup>になる事<sup>こと</sup>が  
で き  
出来ただけでした。